

琉球大学学術リポジトリ

Sinvaudjanから見た牡丹社事件 上 (従Sinvaudjan看牡丹社事件)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2008-12-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高, 加馨, 里井, 洋一 (訳) , Lianes, Punanang, Satoi, Yoichi メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/8427 |

Sinvaudjan から見た牡丹社事件 上
(従 Sinvaudjan 看牡丹社事件)

高 加 馨*

翻訳 里 井 洋 一**

Mou-tan-sheh Accident from Sinvaudjan point of view 1

Lianes punanang

Translator Satoi Yoichi

目次

(Sinvaudjan から見た牡丹社事件 上 本号)

翻訳にあたって

要約

第一章 序論

第一節 Sinvaudjan

第二節 研究動機

第三節 研究方法

第二章 文献の分析と研究

第一節 事件の原因

第二節 戦争発生過程

第三節 戦争発生の影響

第三章 事件の聞き取りと整理

第一節 事件の叙述

第二節 事件の調停人

第三節 事件後の変化

(Sinvaudjan から見た牡丹社事件 下 次号)

第四節 整理と現地調査

第四章 族人の認識と見方

第一節 中年の聞き取り内容

第二節 青年の聞き取り内容

第三節 小結

第五章 結論

附図

附録一 パイワン語漢訳対照

附録二 牡丹社事件年表

* Ping Tung country Mudan township elementary school (台湾・屏東県立牡丹国民小学)

** Dept. of Social Studies, College of Education, University of Ryukyu (琉球大学教育学部社会科教育教室)

翻訳にあたって

里井 洋一

高加馨さんは台湾パイワン族 Sinvaudjan¹ (牡丹社) 出身者として、先住民²の立場で牡丹社事件(台湾事件)の研究をしている若い研究者である。「牡丹社事件(台湾事件)」を日本や中国、そして沖縄から見るのではなく、先住民の立場から考えてみようという試みは、『植民地文化研究第4号』の中で「台湾出兵＝牡丹社事件130年国際学術検討会から」と言う特集がくまれたり(2005年7月)、「台湾原住民研究第11号」(2007年3月)で小特集『「牡丹社事件」をめぐって』がくまれたりするなど、日本の歴史研究の中でも関心が高まりつつある。

「牡丹社事件」の中で宮古島の頭を中心とする琉球漂着民が立ち寄ったパイワン族の村は Kuskus (高士仏社) である。その Kuskus (高士仏社) 出身の華阿財さんは1998年公務員(牡丹郷長等)退職後「牡丹社事件」研究を始めている³。その後、台湾行政院民族委員会委託研究である『原住民重大事件、牡丹社事件』に委員として参加され2003年には報告書を出しておられる。現在、華阿財さんは先住民長老として牡丹社事件研究に邁進されている。高加馨さんが Sinvaudjan (牡丹社) の出身者、華阿財さんが Kuskus (高士仏社) の出身者であり、それぞれの牡丹社事件研究には微妙にそれぞれの立場が反映されている。

華阿財さんが退職された1998年頃、高加馨さんは台湾国立成功大学で卒業論文として、牡丹社事件を研究されていた。華阿財さんは高加馨さんの研究では話者として登場する。先輩である華阿財さんは話者としてだけではなく、高加馨さんの研究に大きく影響したと高加馨さんは話しておられる。

高加馨さんの卒業論文は1998年3月国立成功大学歴史学系『史学第24期』に「從 Sinvaudjan 看牡丹社事件」という論題で掲載され、ついで国立台南師範学院郷土文化研究所で「牡丹社群の歴史

文化軌跡－從排湾族的視点」という論題で修士号をとっている。修士論文の成果の一部は、『植民地文化研究第4号』の中で、「牡丹江事件の真実」という題名で報告されている。

私は、1995年発行の『地図でたどる日本史』の中で、「台湾事件と琉球処分」⁴を執筆した。その中で、私は宮古島民遭難事件に関して次のように書いた。「この事件は、先住民族の視点にたった研究を今後期待する必要がある。さもなければ、先住民は野蛮な『征伐』に値する人々であるという当時の日本や中国の論理にのってしまう危険性がつきまとうように思う。」と

前記の執筆にあたって上記の観点での研究があるのかという問いを、95年頃、沖縄と台湾の関係を長年にわたって研究されてきた又吉盛清氏にお聞きしたところ「まだそのような研究はないようである。」というお答えをいただいた。その二三年後に高加馨さんの研究が学生ながらも始まっていたことになる。

先住民自身が先住民の立場にたった牡丹社事件の嚆矢となる「從 Sinvaudjan 看牡丹社事件」(『史学第24期』所収)をぜひ翻訳したいと高加馨さんをお願いしに2007年9月台湾屏東県牡丹郷に出かけた。高加馨さんに『史学第24期』版は抜粋であり、卒業論文全文を翻訳して欲しいと言われた。卒業論文では、より多くの聞き取りが掲載されており、また長老からだけでなく、より若い世代からも聞き取りがなされている。資料的価値も大きいと判断して、全文を翻訳することにした。

また、長文になることから琉球大学教育学部紀要に二回に分けて掲載することにした。

要約

Sinvaudjan (新保将) は牡丹村のパイワン族の原名である。牡丹社事件時には、Sinvaudjan は牡丹社・牡丹中社・女仍社という三つの部落に分かれていた。歴史上1871～74年にかけて台湾南部恒春半島でおこった一連のできごと及び牡丹と

¹ 原文が書かれた1998年時点では Sinvaujan とパイワン語表記をしたが、著者の意向により現在使用されている Sinvaudjan と表記する。以下同様に現在2007年時点の表記に、翻訳にあたって変えた。

² 台湾先住民のことを高加馨さんが本文においては使っている「原住民」という表記をそのまま翻訳した。

³ 華阿財「牡丹社事件についての私見」(『台湾原住民研究第10号』39ページ、2007年3月、風響社)

⁴ 東京堂出版『地図でたどる日本史』(1995年12月、40～43頁)

高士仏両社と日本軍との戦闘過程を牡丹社事件という。文献資料は日本語と中国語文献が主要なものであり、かつ牡丹社事件を牡丹社あるいは高士仏社の観点から論述されたものはない。文献研究と聞き取り調査によって、総体として整理比較研究を行い、Sinvaudjan から見た牡丹社事件の見解と結論を提起する。

当時の社会環境と先住民の風俗習慣から見た場合、わけもなく部落の領地⁵に進入してきた見知らぬ人は侵入者と見なされ、必ず部落法の制裁を受けることになっていた。遭難その後部落の領地に誤って入ってしまった琉球人は人数が多かったために部落の防衛を圧迫し、ついには族人との間に口論誤解が生まれ、ついには残念な事態を生み出した。この悲劇的なことは確かに人に遺憾と思わせるとは言うものの、現代的な観点で当時の行為を断罪すべきではない。石門の戦闘で日本軍に対して奮勇抵抗した Sinvaudjan は頭目 Aruqu 父子を失い、山中に入って遊撃戦を行った。日本側はくりかえし潘文杰に調停工作を頼み、引き継いで部落の指導者と日本軍が協議の結果、戦闘が終了した。

日本は牡丹社事件を口実に兵をおこし、台湾を攻めた。単に琉球の代わりに正義によって敵討ちをするというわけではなかった。また、原住民との全面衝突も希望していなかったが、牡丹社と高士仏社の断固とした抵抗で戦争となったのである。日本のほんとうの目的は台湾を知り、さらに台湾を侵略し台湾を領有することにあった。牡丹社事件は日本軍が台湾を侵略する口実の一つに過ぎなかった。

Sinvaudjan の祖先はかつて郷里を守り、勇敢に敵を防いだ、これは原住民の名誉である。牡丹社事件は台湾歴史上重要なキーポイントであり、台湾近代史の発展に深い影響を与えている。

第一章 序 論

第一節 Sinvaudjan

「Sinvaudjan (新保将)」は牡丹村のパイワン族原名である。Sinvaudjan という名についての

由来は次の通りである。昔二人の兄弟がいたという。ある日、弟は良い耕作地を発見した。ただし、この土地は蔓草が生い茂っていた。そこで、弟は毎日蔓を抜き除草することに決めた。兄は弟が毎日家の仕事を放り出して、夜明けからどこかへ走っていくのを見ていた。そこで、弟にいったいどうして忙しいのかと聞いた。弟は兄に言った。良い耕地があるのですが、蔓草があまりにも生い茂っているのです。弟は毎日そこに草刈りに行った。彼はその地域の名称を知らなかった。それで、そこを「Sinvaudjan」と名付けた。すなわち蔓藤という意味である。そして、Sinvaudjan が牡丹の原名となり、また、牡丹旧部落の所在地でもあった。現在部落は「牡丹」という。これは、当地域に「野牡丹」が豊富に産するので「牡丹」の名を取ったのである。

Sinvaudjan の祖先がどこから来たのかという確かな話はない。牡丹社事件発生時、Sinvaudjan 部落は女仍溪と牡丹溪間の山の中にあり、牡丹社(現在の牡丹山東側の中腹)、牡丹中社(現在の牡丹山北側斜面)及び女仍社(現在の林務局十八林班地、女仍溪上流北側斜面)三つの部落に分かれていた。1906年(明治四十年、民国前五年)、日本は定住農業と水田耕作政策を実施し、石門埔の漢人黄阿尾が派遣任命され、牡丹社人 Ljauljau Pinevar が協力した。現在の牡丹ダム附近、tataqanという地域に水稻を植えた。その年、たまたま大干ばつがやってきて、他の部落の畑は減収となり、ただ Pinevar の水田は収穫があった。日本はこの機会を利用して部落の人を脅して、鉄線橋から旭海路口と東源の牡丹溪に到る両側を開墾し稲を植えた。

1931年(昭和六年)日本政府は管理を便利にするために、部落を集中させる政策を実施し、原住民部落を全面的に移住させる計画を開始した。1935年(昭和十年)道路が牡丹村附近まで切り開かれ、Sinvaudjan (牡丹社) および近隣の Tjaljunay (女仍社) と Tjakudrakudral (牡丹中社) 部落が現今の牡丹村の位置に移動を開始した。日本は家族を単位とすると規定した。いくつかに分かれて牡丹国小附近に移住し、まとまって

⁵ 高加馨さんはパイワン族が貴族制をとっており、その頂点にいる頭目が支配する地域を領地と表現したという。

移ったわけではない。1945年（民国三十四年）、大台風が発生し、部落の家がすべて吹き倒れた。ここにいたって、交通に便利な道路の両側に居住を始め、現在の牡丹村を形成した。

Sinvaudjan の指導者は Ruljigaljig（漢姓姚）家、そして Tjaljunay の指導者は Puiku（漢姓許姓）家、百余年前 Kavaluwan（漢姓林）家が獅子郷旧内文（枋山溪下流）から族人を率い今の中間路対面の山に移住してきて開墾、木を切って家を作った。作業をしている時、Ruljigaljig と Poiku が族人を率いてやってきて、Kavaluwan に退去するよう迫った。Kavaluwan は順わなかつたので、Ruljigaljig は発砲しようとしたが弾丸がとびださなかった。村民は神意だと認め、Kavaluwan が住むことを許した。そして日本の植民地時代に部落が移動した時、（Kavaluwan は）いっしょに牡丹村に移った。

現在の牡丹村は本来 Sinvaudjanm Tjakudrakudral と Tjaljunay の三部落に加えて、Kavaluwan が率いてきた人々によって成り立っている。1944年日本はまた枋山溪上流から Varalji 部落を移してきて、現在の上牡丹に定住させた。Sinvaudjan の人数が一番多いので、Sinvaudjan を部落の通称とした。

第二節 研究動機

小さい時から「石門古戦場」を通して、その地勢に圧倒され、そこは、ほんとうに一つの天然の障壁であった。年を経るにしたがって、「石門古戦場」の伝説に対して更に多くの好奇心と疑問を持った。とはいえすぐに筆者を当時の歴史を探究することにはつながらなかった。あるいは茫漠とはしていたが少しは関連していたのかもしれない。大学1年で台湾史を学んでいた時、「牡丹社事件」というテーマがあった。牡丹社、それはまさしく筆者の故郷である。内心で思わず「おまえが取り組まなくて、誰が適任といえるのか？」という声が鳴り響いた。後に卒業論文を書かなくてはならなくなった時、ついにその時代を探求する機会を得た。筆者は全身全霊をうちこみ、その時代の祖先の英雄的事績、すなわち Sinvaudjan の子孫としての観点でもって新たな牡丹社事件の解釈を感得することができた。

歴史学者の学術知識の成果、すなわち文献によると1871年から1874年に至る台湾南部恒春半島でおこった一連の事件を「牡丹社事件」と名づけられている。しかしこれまでの学者には琉球人がどうして牡丹社・高士仏社によって殺されたのかという原因を研究するものではなく、ただ牡丹社と高士仏社の「蕃社」が琉球人を殺害し、日本が懲罰する口実となり、さらには台湾を清朝が重視するようになったと書くだけであった。

ある人は原住民の風俗習慣および法的状況を理解せず、原住民はきわめて残忍な共通性があると誤解した。このような視角は客観たりえず、人々に誤った思考様式を作り出した。私自身、Sinvaudjan の子孫として、族人の立場で考え、新しい解釈をうちたてる責任がある。

「牡丹社事件」の論文を探しだし、国内外の文献を研究することによって、過去の歴史の真相を探求し始めた。文献資料の内容を解読し始めた時、内心に強い衝撃が走った。筆者は漢人の教育的思考様式を受けて、文献上で書かれた「歴史」を取り扱いそれから、族人に何か54名の琉球人を殺害したのかを聞きとりするはずであった。しかし、内心深いところに不満な声があった。筆者は「事実」を見極め、「真相」を理解し、原住民の観点で書かれた歴史を編み出さなければならない。ここにおいて、心を激しく揺れ動かす地方—Sinvaudjan に戻って行った。

そこで筆者は細心に思索をはじめるとともに、族人の思考様式を試してみた。そこで、祖先達がこの事件を処理したあり様を理解することができた。いわゆる国には国法があり、家には家憲があるように、伝統的原住民社会においては、部落には部落内の事を規定する規制と禁忌があった。当時琉球人は意識しなかったとはいえ部落の勢力範囲に突入した。ただ、当時の慣習で、族人はこの行為をある種の侵入行為と認識した。祖先たちは族人を保護するために、狩猟区域を守る決定をしていた。理由なく侵入してきたものは必ず懲罰を受けなければならなかった。

昔の事を、結局現代人は理解しがたいことだと考えるであろう。もし、現代的観点で当時の社会的状況、時空的背景を考慮しなかったならば、過去の何事が判断できるというのだろうか。このよ

うな思考方法は実際公平妥当とはいえず、容易に単一の歴史観点の渦中に陥っているといえよう。反対に族人の声の中に、真実の表現が浮かび上がるのである。

慎重に整理・思索し、ついに伝統的な漢人本位主義の歴史観点から離脱し、みずからSinvaudjanの子孫としての立場をとり、文献で不十分な観点を補足し、改めてSinvaudjanにとっての牡丹社事件を新たに定義した。筆者の心中では、祖先の作為を理解し、進んでいわゆる「歴史」の真実と背景を探索し、パイワン族の血・Sinvaudjanの精神に恥じることなきことを、いつも心にとめてきた。

第三節 研究方法

現在、「牡丹社事件」に関する台湾の研究、文献は豊富である。ただし、日本語資料が中心で中国語の資料論述は比較的少ない。中国語書籍と日本語書籍を比較してみれば、日本語書籍は内容が比較的詳細で、発生の経過が詳細に叙述されている。中国語書籍の内容は発生経過が軽く淡泊に描かれ、日本の侵略行為、事件発生後における中国の影響、すなわち清朝が台湾を重視しはじめ、原住民をいかに教化したかに、重きをおいて論述されている。

筆者が参考にした文献を見てみると、中国語あるいは日本語文献ともに、牡丹社高士伝社の観点で「牡丹社事件」をみた文献是一片もない。そこで筆者は牡丹社の子孫の立場と観点で論述していく。筆者の研究方法は下記の通りである。

1. 文献資料

国内外の歴史文献資料を読み、牡丹社事件をさらに深く理解した。史料を分析研究し、牡丹社事件の原因と影響及び台湾における歴史上もつ重要な位置を整理帰納した。但し、文献には原住民部分がいへん少なく、牡丹社と高士伝社の当時の状況もまた叙述が少ししかなく、当時の二社原住民の行為に関する分析的論述に至っては全く存在しない。さらに原住民的観点の史料叙述に至っては皆無ということが出来る。筆者はこのわずかな史料の基礎の上に、現地聞き取り調査をした。

2. 田野調査

原住民の伝承方法は、口伝的な文化方法、すなわち歌舞に託して過去の歴史が伝承されている。このような方法はきわめて自然ではあるがたいへん多くの歴史が抜け落ちる。このため子孫への流伝には限りがあることになる。そこで、この研究では田野調査方法を用い、部落内の族人のところへ行って聞き取りをし、族人中の口述歴史を収集し、文献中の記載と記録文献中にはないSinvaudjanが語り伝えてきた牡丹社事件とをあわせて検証した。筆者本人がSinvaudjan人であり、母語でもって族中の年長者と懇談した。この聞き取り調査は、(本論文の)大きな特色となっている。

本文は五章で構成されている。第一章は「緒論」；第1節はSinvaudjanである。Sinvaudjanという言葉の意義と由来、そしてSinvaudjanの部落の歴史と状況を簡単に述べる。；第2節は研究の動機である。論文を書くことになった理由と研究目的を説明する。；第3節は研究方法である。論文の研究方法与内容構成を述べる。第二章は「文献研究」である。事件の原因、戦争発生の過程、戦争発生の影響と三節に分ける。国内外の歴史文献中、牡丹社事件に関する資料を研究し、特に原住民部分を記述している内容に焦点をあわせ、整理編集して仕上げる。第三章は「事件の聞き取りと整理」である。事件の叙述、事件の調停人、事件後の変化及び現地調査と整理と四節に分ける。筆者は実際に部落内の年寄りや重要関係人物の子孫を訪ね、話者が描いた事件経過、潘文杰が事件中で演じた役割、事件後部落に生じた変化と影響を記録した。ならびに事件に関連する重要地点を実際に踏査した。第4章は「族人の認識と見方」である。中年への訪問内容、青年への訪問内容、小結と三節に分けた。戦後に生まれた族人を訪ね、族人の牡丹社事件に対する理解程度と自己認識に焦点をあてるとともに、族人の事件の原因に対する認識に焦点を当て、さらに検討を加えた。第五章は「結論」である。文献研究と田野調査の内容について、整理・比較・研究検討を加えてまとめ上げ、Sinvaudjanの観点による見解と結論を提示した。

第二章 文献の分析と研究

Sinvaudjan、漢名は牡丹社である。民族学的分類ではパイワン族の巴利鑿利鑿 (Parilarilao) 群に属している。人類学者によると、パイワン族は単一部落で社会的生活を形成し、各部落代表が自治単位であり、国家的概念ということもできるという。各部落がふだん日常的に交流している社群を「友社」と互いに認め合い、もし交流せず行き来する社群があれば、すなわち「敵社」と認定する。

部落の対外関係において、隣社群との連合が一大組織となり、社群間のいかなる接触の処理であったとしても共同問題となり、よって各社群が協議し交渉する。敵社に対して、もし土地あるいは人民間の争いが発生すれば、おしなべて即衝突となる。但し通常は双方の友社関係を利用し調停が入り、調停成立以後事を起こした側が謝罪して終わる。もし調停が不成立となれば戦争行為あるいは

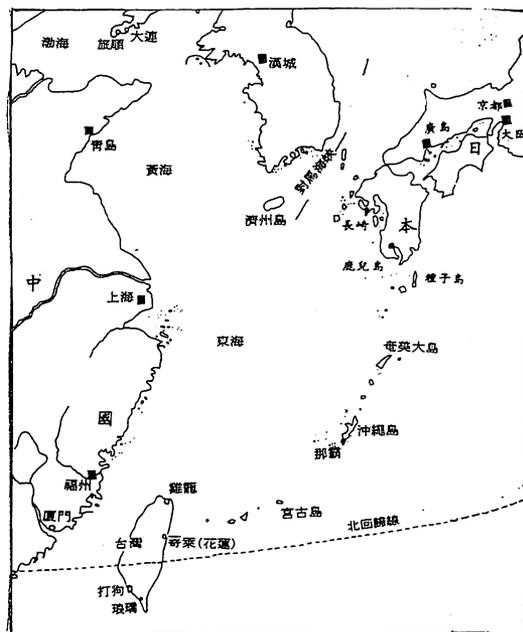
出草復仇を宣言する。部落の領地に進入した外人に対しては、一般的には「敵社」の人と認定し、戦争行為あるいは出草復仇を宣言する。この種のが台湾における普遍的状況であり、実務的に処理されてきたのであった。ところが、日本は牡丹社事件をおこし、台湾侵略の直接的口実とした。

第一節 事件の原因

明治新政府は一連の改革を実施したために、一部の人々に損失を与え不満を引き起こしていた。日本政府当局は士族の不満＝反政府的気持ちを転移するために、「内乱」の圧力を「外征」に転換しようとした。1872年4月、柳原前光は李鴻章と改約問題を交渉していた時、琉球宮古島漂流民が殺された「台湾事件」情報を入手し、迅速に外務卿副島種臣に報告した。副島は了解し、人を台湾に派遣し探査を行うとともに、1871年に台湾で発生した琉球漂流民殺害事件を利用して日本侵台の導火線とした。台湾と宮古島の位置関係は地図1の通りである。当時の琉球人仲本筑登之と島袋筑登之の記録には事件経過が記載されている⁵。

「辛未（明治4年（清同治10年））十月十八日、宮古島八重山島の船四艘、那覇港出帆、計羅間島へ潮掛、同（十月）二十九日同所出船、翌十一月朔日、昼夜遙に宮古島を見掛けられども、亥子の風に転港をとること能はず。風に任せて漂流す。同五日台湾の外山を見付たり。六日地方近くなりぬれば、ハシ舟に四十人許乗込、上陸、舟小さく波高くして三人は溺死せり。又階舟を帰し残りの人々を運送す。本船は間もなく破壊せり。

六十六人陸に登り、人家を求めて徘徊す。支那人兩名に逢へり。人家の有無（道）を問ふ。兩人日く。西方に行ば大耳人ありて頭を斬るべし。南方に行くべしと教え、兩人の案内にて南方に向ひ行く。日既に暮れんとす。兩人路傍の石穴を指て日く、人家猶遠し、今夕は此洞中に一泊すべし。六十余人宿すべき程の穴にも非れば、皆能はずと答ふ。兩人之を強れども承諾せず。兩人日く、我言を用ひざれば何もかまわぬと言て激怒す。皆思へらく、此兩人は盗賊の類にして、南方に行くべ



地図1：宮古島相關位置

出典：藤井志津枝《近代中日関係史—1871～74年台湾事件》頁235

⁵ 伊能嘉矩、《台湾文化志》（下巻）、東京、刀江書院蔵版、1966、p160-163

訳者注：ゴシック部分は原文にはあるが論文には無い部分。〈 〉部分は論文にはあるが原文にはない部分。原文と比較すると八重山台湾漂着人に関する記事等が論文では省略されている。

しと教へしも詐なるべしと。これより兩人に別れ、西に転じて行く。夜も已に深ぬれば、此夜は路傍の小山に宿す。此日朝船中に食せしままにして何も食はず。

七日南方に当り山あり、人家ありげに見受れば、是を目当てにして行ぬ。七時分に至り着行程三里位。果して人家十五六軒あり、茅屋なり、男女住居す。耳太く肩まで垂るものあり、身の長並の人なり。その内の一家に助け、すなわち食事を求める。暫ありて小貝に飯を盛り、六十六人に与ふ。初更比、唐芋に米をまぜ、二枳焚位の鍋にて焼き、二鍋を与ふ。此家に投宿のところ、夜半比、一人左の手に薪の火を握り、右に刀を携へ、戸を推門き入来り、二人の肌著を剥取去る。八日朝、男五六人各鉄砲を携え宮古人に向て日く、我等獵に行んとす、帰るまでは必ず滞留すべしと。皆口を揃へ、之より転じて他に行んと謝す。余の土人も強て之を止む。宮古人益疑惑を生じ、二人三人づつ散りへに逃去、又一つに合し、

一里二三合行けば小川あり、此所に休息す。男三四人女四人追来れり。依て川を渡り又逃げ行、路傍に人家五六軒あり。この内の一家を窺へば、一人の老翁（広東商人劉天保）出迎へ、琉球なるべし、首里か那覇かと言ふ。この詞を手寄に思ひ、翁の家に憩ふ。翁の子日く、姓名を記さば府城に送るべし。仲本等筆紙を乞ひ、姓名を書さんとす。先に追来りし者共、追々に重み、三十餘人に及べり。各刀を抜く。庭中に立し宮古人の簪衣服を剥取、一二人づつ引連れ門外に出、僅かに二十三人残れり。一人裸体にして門外より馳帰り、皆殺さると云ふ。仲本島袋等さてもと思ひ、立出で伺へば刀を以て首を刎ね居たり。依て驚き、各四方に散乱す。仲本島袋外に七人は翁の家に潜居す。此夜翁の家に宿す。

九日午前、翁の婿来り日く、此地甚危し、我家に行んと。九人を誘ひ婿の家に至る。兩日過ぎ、宮古人三人翁の教により婿の家に来る。三人日く、余の人はみな山中に於て殺されたりたりと。此家に滞留すること四十余日、都合殺さるる者五十四

人なり。十二月二十二日、婿同伴にて出立、陸行（三日）、夫より小舟にのり五六里行、又陸行、夜三更頃、婿知人の家に投ず。滞留二日、翁の婿は辞し去る。二十五日逆旅主人駕籠より案内す。夕刻鳳山県といふ所に至る。翌日、（県の役人が来て）十二人へ木綿綿入一枚づつ与ふ。二十八日（二日後）十二人は陸より護送せられ一大村に宿す。行程六里位。二十九日護送人相付、発程、台湾府城へ著す。路程八里計。

壬申正月十（十八）日、（十二人）火輪船より支那福州府に送らる。十六日（福州碇泊二日後）福建省著琉球館入、六月二日琉球唐帰船に乗付。同所出帆、同七日那覇へ著港。」

1872年9月、副島種臣はアメリカ駐日公使徳朗（C.E.DeLong）を通じて李仙得（Charles w.Le.Gendre）⁷を知った。李仙得の経歴は日本の侵台にとって最も求めている道案内役であった。そして李仙得もまた熱心に日本に向け台湾「番」地無所属論を提出、さらに出征を建議し、日本の准二等出仕に任命されている。1873年3月、副島種臣は中日修好条約の全権大使に任命され、随行の副使柳原前光に台湾問題の交渉を受け持たせ、毛昶熙と董恂の二人から、「中国の政教が及ばないので、生蕃の横暴をふせぐことができない、」という答えを取得した。このようなわけで問罪のため兵を起す合法性を強化しえた。そして1873年3月に小田県の漂流民が害され、これが日本征台の近因となった。

1874年2月、征韓派の失勢により内乱がおこり、南進政策への転換が主流となってきた。4月4日征台機構が成立し、4月9日西郷従道が艦隊を率い東京から長崎へ向かった。この時列強が干渉し、4月19日暫くの間征台行動の停止するようという通知が出された。但し、大隈重信、西郷従道、李仙得が協議し、政府の命令を顧みないことを決定した。横暴にも4月27日出発。5月3日アモイに至り、閩浙総督李鶴年に「日軍征台通知書」を送付し、5月8日有功丸号が琅嶠に上陸、5月10日第二陣も琅嶠に上陸した。

⁷ Le.Gendre 将軍フランス系アメリカ軍人。1866年アモイ領事。1867年、アメリカ船籍 Rover 号が遭難した時、李仙得はアメリカ公使の命令を受けて台湾に来て交渉した。しかし交渉は不成立となり、アメリカ軍艦は亀仔角社に行き、却って原住民に撃退された。そこで李仙得は通訳および閩粵頭人を率いて自ら猪東社へ赴き、卓杞篤と協議し約束を取り交わした。卓杞篤との歓談はきわめて楽しいもので卓杞篤を何度も訪れている。当時の台湾原住民のことをかなり理解していた人と言うことができる。文章を残し、台湾南部琅嶠付近の地図を作製している。

清朝では反応がなく、ようやく5月11日になって、李鶴年が日本軍の侵台行為を批判し撤兵を要求した。福建省・台湾の官員はだらしなく、英国がすでに日本軍が上陸したことを通知するのを待ち警戒を始めたが、時すでに遅く、「牡丹社事件」的一幕はすでに始まっていた。

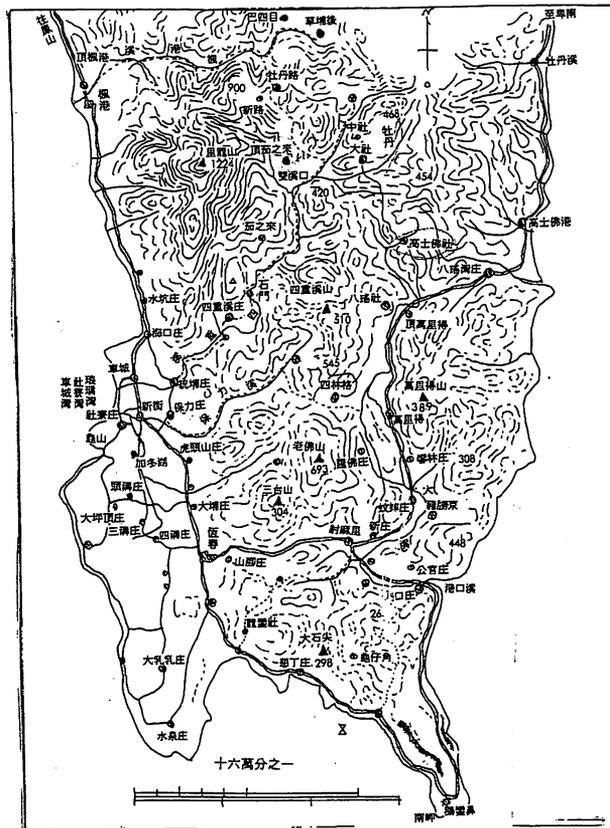
第二節 戦争発生過程

1874年5月7日、日本軍は初め射察に到着し上陸駐留した。住民はとても恐慌をきたしが当地の住民を安撫するために、日本軍はすぐに陸軍の先鋒を派遣し告示を出した。「琉球漂流民を殺害した原住民を討伐するために、土地を借り、人を雇い、物を求め、皆全て対価を支払う。」と。民心はやや落ち着きを取り戻した。牡丹社、高士仏社

をスムーズに征伐するために、日本軍は先手必勝、琅嶠十八社中十六社の部落との間で日本軍の主要な討伐対象である牡丹社・高士仏社を十六社は助けないということ柱とする合意を達成した。

(一) 牡丹社の動向

日本軍が牡丹社を攻撃する理由は、琅嶠十八社中規模最大で最も精悍な牡丹社が、日本軍に抵抗する姿勢を堅持しつづけたことにある。日本軍は射察上陸後、琉球漂流民を殺害したのは高士仏社人であることを知っていたが、牡丹社人も責任を分かち合う共犯者だとした⁸。ただし、牡丹社は早々と情報を取得し、きびしく日本軍の攻撃に対する備えを準備した。そのため、牡丹社人は日本軍進攻の主要対象となった。当然高士仏社も目標となった。部落の位置関係は地図2の通りである。

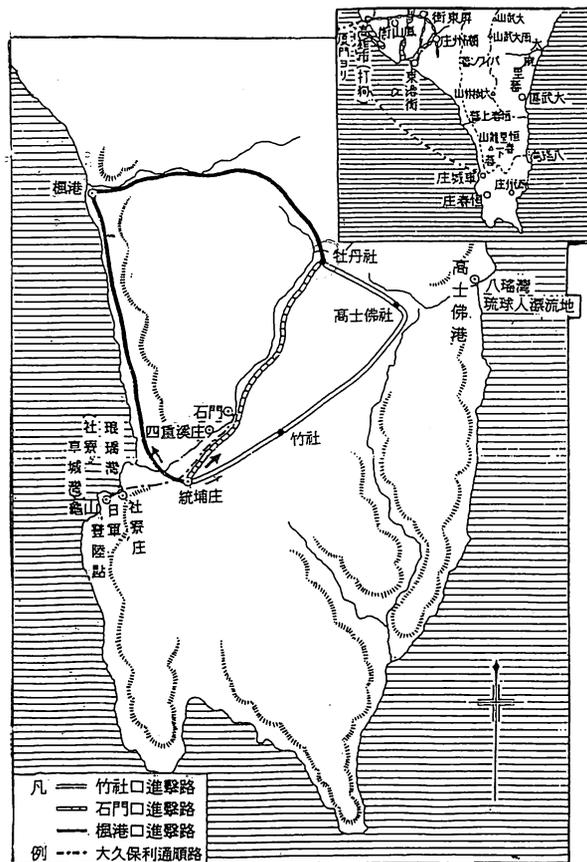


地図2：1874年恒春半島各部落相關位置図
出典：藤井志津枝《近代中日關係史-1874~74台湾事件》頁236

⁸ 藤崎濟之助、《台湾全誌》(一)、台北・成文出版社、1985、p232-234 訳者注 原題は藤崎濟之助『台湾史と樺山大將』p232-234、1926年12月30日、国史刊行会、

1874年5月18日、日本兵は四重溪での偵察の時、5・6人が隊を脱げ草むらで待ち伏せていた原住民に襲撃され、日本軍は敗退した。原住民は日本軍北川直の首を取り、たち去った。20日、日本軍は再び狙撃された地方を偵察し、原住民の動静を探った。日本軍は原住民に恐れを抱き、友好的な平埔族人会の援助を求め、ついには平埔族の武器を没収することになった。三重溪で、断片的な戦闘が行われ、原住民が1人死亡し、日本兵が2人負傷した。21日、原住民は四重溪にあって日本軍搜索隊12人を攻撃、日本軍歩兵第19隊が支援におもむき、牡丹社人と日本軍が交戦、夕暮れになったので日本軍は退却した。

22日、佐久間佐馬太が日本軍を率い、車城人黄文珍が案内役をつとめ、再度石門に攻めてきた。石門は牡丹社の入り口であり、天然の要害で、守るに易く、攻めるに難しく、原住民は岸壁に隠れて抵抗した。戦いは激烈をきわめ、その地には道は無く、戦闘は四重溪の中でおこなわれ、1時間余に渡って銃撃戦が行われ、原住民は負傷者を運び出し、死体を棄て、その首の多くは日本軍に斬られ、回営地に運ばれた⁹。遭遇戦となった後には原住民は多くの日本軍の銃砲武器を獲得した¹⁰。首領阿祿親子はすでにその他の原住民16人とともに戦死していた。日本軍は戦死6人、負傷20人であった。黄文珍は流れ弾にあたり死亡、日本は彼



地図3：日軍三路進攻図
出典：陳如君《乙未之前恒春地区開発之研究》頁57

⁹ 蔡啓恒訳〈日本之1874年の遠征〉、《台湾之過去與現在》(第一冊)台湾銀行經濟研究室編印、台湾文献叢刊第一〇七種、1972、p95
¹⁰ 蔡啓恒訳〈日本之1874年の遠征〉、p97

の家に25元を給付した。これが有名な「石門之役」である。

6月1日、西郷都督と谷口・赤松両参軍、佐久間・福島・樺山少佐など各隊の将校が石門、竹社、楓港三路からの総攻撃を行い、三面から牡丹社に進撃した。進攻ルートは地図3のとおりである。兵員総数は一千三百余人であった。左翼は谷口将軍が総指揮をとり、樺山資紀が補佐し、水野遵が通訳をした。楓港溪にそって東へ進軍、溪流を渡り、険しい坂を登り、原住民の狙撃を受け、士兵2人、案内1人が負傷した。女仍社へ進み、原住民女老幼二人が捕らえられ、日本軍一人が打ち殺された。6月3日女仍社を出発、行軍すること12時間で牡丹社の背面を取り巻き攻撃した¹¹。

中央部隊は西郷都督が総指揮、実際は佐久間が指揮をとり、新街の張鴻業と保力庄の張連生¹²が案内人で、石門一帯の険路を通して牡丹社へ行くつもりであった。この道の行軍は困難で、加えて原住民が樹木で障害物を置き、前進速度が緩慢で、日本軍が牡丹社に入った時には、部落の中の人はずでに避難していた。少数の牡丹社人が林に身を隠し銃を発射した。日本軍は反撃し、部落の家屋を全て焼き払ってしまった。

右翼は赤松則良が指揮をとり、詹森が通訳となり、竹社から高士仏社へ進攻した。部落に入ろうとした時、原住民の待ち伏せ銃撃にあい、三人が戦死、二人が負傷した¹³。高士仏社原住民はすべて家を離れていた。日本軍は家屋敷を焼き払った。

1874年6月3日、日本軍は牡丹社で合流、但し、原住民はずでに逃げ去り、部落を焼いたほか何も得るものは無かった。日本軍は部分的に軍を駐留させた他は全て翌日には龜山東北の統埔に移った。日本軍は牡丹社の要衝、石門内の雙溪口に兵を派遣し守らせ、原住民の糧食を断つともに、再び人を派遣してその動静を探らせた。

牡丹社は「石門之役」で首領を失ったが、なお勇敢に日本軍に抵抗し、生きるためにさらに深山密林に入った。日本軍は牡丹社を破壊した後も、

牡丹社・高士仏社に早く投降するよう呼びかけた。日本軍はこの大規模な軍事行動によって、牡丹社人を討伐できなただけでなく、かえって攻撃に遭い死傷者がでた。その後、安全と交通問題を考慮して、わずか三日で牡丹社から撤退せざるをえず、雙溪口に分営が設立された。この戦いの後、牡丹社はなお出兵し抵抗を続けた。6月14日、原住民は牡丹社脚溪中の洗浴に日本兵を追いかけ、銃で3名を倒し、首を取りあげた¹⁴。6月17日、原住民は雙溪口で日本兵がサツマイモを掘取っている時、洋銃を盗み取り反撃し、日本兵二人を斃した¹⁵。

その後、統埔の林阿九、猴洞の陳阿三、両人が日本軍の密旨を帯びてやって来て、牡丹社と高士仏社の投降を促した。最後には抵抗してきた部落は種族保存のため日本軍の説得を受け入れた。7月1日、保力庄で西郷従道と面会し、中に立った双方の調停人潘文杰もまた停戦についての相談に参与した。

(二) 事件調停人—潘文杰

潘文杰(1853—1905)、咸豊5年四重溪で出生、彼は卓杞篤の外甥で、後卓杞篤に育てられ、名前をJagarushi Guri Bunkietという。1874年(明治7年)日本軍が牡丹社前に進攻する前に大頭目は死去し、卓杞篤が後を継いだ。

日本軍は牡丹社に進攻する前、すでに卓杞篤と協議しある一定の共通認識に達していた。ここにおいて、潘文杰は彼の養父卓杞篤を助けて、牡丹社・高士仏社と日本軍間の間の調停工作に従事した。しばらくして卓杞篤が世を去り、潘文杰が琅嶠十八部落の頭目身分を継承した。時に22歳であった。日本軍が琅嶠に上陸した時、彼は今後の時勢を考え、すぐに投降帰順の意志を表し、日本に対しては好意を示し、その上、牡丹・高士仏社などの未投降部落動静の日本軍偵察を助けた。日本軍のために力を発揮し、原住民を説得した。西郷従道は謝意を表し、潘文杰に褒状・洋銃・刀剣と紅

¹¹ 黄有興〈日酋樺山資紀與日本資台—樺山出任台湾総督之背景〉《台湾文献》、第三十三卷第二期、p147

¹² 藤崎濟之助、《台湾全誌》(二)、p445、訳者注 前掲 藤崎濟之助『台湾史と樺山大将』p445、

¹³ 蔡啓恒訳〈日本之1874年の遠征 p103

¹⁴ 王元樞《甲戌公牘鈔》台北・台湾銀行經濟研究室編印、台湾文献叢刊第39種、1956、p68

¹⁵ 王元樞《甲戌公牘鈔》、p69

甌を送った。

第三節 戦時発生の影響

(一) 牡丹社

文献資料は事件が、牡丹社と高士仏社に及ぼした影響は、ほとんどないと叙述している。畢齊礼(M. Beazeley)と鳥居龍蔵の調査報告には事件発生後の牡丹社部落の状況が描かれている。

1875年英国皇家地理学会会員畢齊礼は台湾南端の調査をした。畢齊礼は清朝海関の委託を受け、台湾南端の調査へ出かけるとともに鶯鑾鼻に燈台をたてる用地を買い入れた。このため、牡丹社へ行く機会を得た。彼が記述したことによれば、牡丹社は中国(訳註：清朝)の新管轄区で、大半は茅草となり、木册で回りを巡らし、住民は非常に開化し、礼儀正しい。牡丹はとてもよい地方である。山中の平原に位置し、どのような植物でも植栽できるようだ。休憩三時間後、再度とても整備された牛車路に沿って出発した。この牛車路は日本と原住民が戦った時に築かれたものである¹⁶。という。

1898年9月日本の人類学者鳥居龍蔵の調査によれば牡丹社一帯の風俗は、1874年当時の状況とほとんど変わらないという。その内容記述は次のとおりである。；男子はある種の弁髪に、腰には紺色の布を巻き、遠くに行く時には肩掛けを着けている。女子は髪を左右に分け、残りの髪は頭の上に巻き付け、漢人の古着を着けている。住居は一見レンガのようだがほんとは泥土を日乾しこれを壁のように積重ねて四辺を造っており、茅で屋根を葺き、このような家が連立して山の上にある¹⁷。

牡丹社人は日本軍が攻撃したころのことを覚えていない。なぜなら、そのころの牡丹社の族人の多くは日本軍に殺され、生き残った者も年とってしまっているからである。族人の長寿者は稀少で、老人に詳細に追憶している者はほとんどまれである。その中の一人四十過ぎの名前を Kayava と

いう人は、戦争の頃は少年で、戦地で地上に落ちた矢を拾う手伝い、銃や食料を運ぶこともした。現在、社内の有力者として尊敬され、現在 Kayava だけが牡丹社戦役を熟知しており、その他に社内で追憶できるものはほとんどいかなかった¹⁸。

(二) 潘文杰

潘文杰所轄の部落はしだいに発展し、(日本との)良好関係を保持していた。日本軍が台湾を離れると、清朝は潘文杰と接触した。1875年(光緒元年、明治8年)、清朝は恒春城を築き、潘文杰は清朝をおおいに助け、功労が認められ清朝から「潘」という姓を与えられた。1891、93年清朝は原住民を討伐し、潘文杰は再度原住民と清朝の間を調停する任務につき、清朝から「五品」という官位を与えられた¹⁹。1895年中日甲午戦争で清朝は敗退、下関条約を結び、日本は台湾の統治を開始した。

潘文杰は牡丹社事件により日本と良好な関係を樹立していた。その他の部落は日本に対して反抗と懐疑を体し、彼一人が民意と異なり、率先して日本と修好し、帰順の意を表明した。その後、日本と部落の架け橋となり、彼の族人のために「恒春国語伝習所」設立に努力し、彼の族人に教育を受けさせた。日本は潘文杰に功ありと認め、1897年「勲六等瑞宝章」を与えた。1903年日本は潘文杰を卓著と表現し、恒春庁参事に任命した。1905年12月死去。潘文杰の一生は不断に日本を淵源としたといえよう。1895年の日本の台湾植民地化によりさらに関係を深めたのである。

第三章 事件の聞き取りと整理

本章では筆者自分自身が主要には Sinvaudjan 人であるという観点で、部落の年寄りが認知理解している牡丹社事件を記録整理する。そのためには必ず族人の長老を訪問しなければならない。そ

¹⁶ 劉克襄著、《横越福爾摩沙—外国人在台湾旅行(一八六〇～一八八〇)》、台北、自立晚報社文化出版社、1989、p134-135。

¹⁷ 楊南郡訳註、《探検台湾》、台北、遠流出版社、1996、p287、訳者注：原論文は「台湾南部蕃社探検談」『地学雑誌第十一集』第125、126巻に所収されたもので、鳥居龍蔵が明治32(1899)年3月22日東京地学協会での講演した記録である。原論文p34-3

¹⁸ 楊南郡訳註、《探検台湾》、p288、原論文p344

¹⁹ 藤崎濟之助、《台湾全誌》(二)、p584—588 訳者注 前掲 藤崎濟之助『台湾史と樺山大将』p584—588、

の上にたっこそ、文献資料を理解することができる。主に「牡丹社事件」を誘発させた Sinvaudjan と Kuskus の両部落に焦点をあてる。これ

により、Sinvaudjan だけでなく Kuskus にも訪問する。筆者が Sinvaudjan 人であるため、Sinvaudjan に比重をおいて訪問する。

表 1 主要話者基本資料表

| 姓名 | 漢名 | 年齢 | 社別 | 関係 | 理由 | 口述概要 |
|----------------------|-----|----|--------------------|-----------|--|---|
| Savid Pavala | 林秀蘭 | 68 | Sinvaujan (牡丹社) | 表姑媽 | Kavaluwan 族牡丹移住の三代目の子孫 | Kavaluwan の事情・権力構成の変更 |
| Puljaljuyan Pasavuta | 李金水 | 76 | Kuskus (高士仏社) | 親戚 | 族中の長老となり、父執輩は社内勇士となり、父執輩の智恵と勇気を踏襲 | 当時の各社の関係、琉球人の上陸地点と上陸後に移動したルート、誰が Kuskus と日本との戦闘を指導したのか、戦後の影響、潘家の地位 |
| Punanang Aruqu | 高天明 | 57 | Sinvaujan (牡丹社) | 父親 | Sinvaujan と Kuskus の村幹事を以前担当した。 | Sinvaujan の現況と歴史 |
| Sauljaljui Pasavuta | 呉金玉 | 83 | Sinvaujan (牡丹社) | 表姑媽 | Ruljigaljig の専属女巫師となる、女巫師は通常史官的地位も兼任している。 | Ruljigaljig 族の起源。Aruqu はどのような家族に属していたのか質問した・過去の部落の状況 |
| Kivi Pasetjang | 張矢枝 | 83 | Tjakudrakudral(中社) | 部落族人 | 部落老人 | 中社の所在位置 |
| Kuliu Patekaz | 張進加 | 80 | Sinvaujan (牡丹社) | 表伯公 | Kavaluwan の家僕を以前担当、現在族中の長老 | Kavaluwan の事情、以前の三頭目家の勢力範囲、過去の部落の状況、潘家の地位 |
| Drenger Kukung | 柯秀月 | 68 | Sinvaujan (牡丹社) | 表姑媽 | 「蕃童教育所」で学んだ | 日本支配時代の部落の状況 |
| Kivi Qaidau | 白秀妹 | 68 | Sinvaujan (牡丹社) | 姻親関係 | 「蕃童教育所」で学んだ | 日本支配時代の部落の状況 |
| Mavalid Voijeluk | 華阿財 | 59 | Kuskus (高士仏社) | 姑丈 | Kuskus の頭目 Ijimatjaq の子孫、台南師專卒業。かつて、牡丹郷郷長、県会議員となり、現在、行政院原住民委員会に任職 | 琉球人の上陸地点と上陸後に移動したルート、日本の侵台と部落の抵抗過程。本人は歴史を喜んで学び、日本語を理解し、そのため語りの内容が適切に完成した。 |
| Kivi Puiku | 許美妹 | 77 | Tjaljunay (女仍社) | 女審婆 | Puiku 頭目家の子孫 | 牡丹社事件の口述、頭目の事情・権力構成 |
| 姚丁興 | | 91 | 港仔村 | 港仔村人 | 満州郷港仔村人、祖先は屏東県内埔郷の客家人、後現在の満州郷港仔村に移住する。幼少時よりこの地で成長する。彼の姉は潘姚龍妹で潘文杰の孫嫁、 | 潘文杰の事、琉球人上陸地点を聞き取りした。 |
| 陳連風 | | 82 | 射寮村 | 射寮村人 | 車城郷射寮村人、幼い頃から射寮に居住する。 | 日本の確実な上陸地点、牡丹社事件を知っているかを聞き取りした。 |
| 潘榮宗 | | 37 | 旭海村 | 筆者の父親と義兄弟 | 潘文杰の嫡系五代目、現在牡丹郷旭海村に居住。現在中山科学研究院に在職中 | 潘文杰の事績、潘文杰の子孫であることを証明する証拠があるかないかを聞き取りした。 |

筆者自身は母語でもって、族中の年寄と意志を疎通させる。但し、比較的深奥な用語はすべて助けを得て、筆者の父母に翻訳を助けてもらった。筆者の父親の名前は Punanang Aruqu、漢名は高天明、1940年生、現在牡丹郷公所に勤めている。筆者の母親の名前 Punanang Baules 漢名は高林光妹、1945年出生。

筆者が訪れた主要な話者は表1の通り。順序先後はパイワン語発音の字母順序の配列である。

第一節 事件の叙述

牡丹社事件がおこったのは120余年以前である。当時を経験した族人はすでに亡くなってしまっている。そのため、現在一つ前の世代の族人の方々に、先祖がかって話された若干の事績を聞き取りした。以下、話者が話した牡丹社事件の経過である。筆者は次の三つの部分に整理した。

- ：（一）Sinvaudjan の叙述、
- （二）Kuskus の叙述、
- （三）其他。

（一）Sinvaudjanの叙述

話者：Kivi Puiku述、Baules 訳

Kuliu Patekaz述、Aruqu 訳

Sauljaljui Pasavuta述、Baules 訳

主要口述の内容、Sinvaudjan と日本軍との Macacukes での応戦状況から誰が指揮して日本軍と戦ったのかという話に及ぶ。

Kivi Puiku の口述内容

「Macacukes（石門峡谷一帯）は昔、流量が非常に多く、水深も深く、全く渡りようがなかった。私たちは、ふつう Macacukes 山頂の後方を迂回し、大梅溪の岸沿いに、四重溪へ行った。昔、祖父たちが Macacukes で日本人と戦ったことをすこしだけ聞いたことがある。はじめは地の利から小規模ながら勝利した。その後、私たちの武器と日本軍の差があまりに大きいので負けてしまった。どうも私たちは以前の猟銃で、非常に貧弱、それで上に撃つことはできるが、下に撃つことはできず、そのため弾が下に落ちることを防ぐために、私たちは銃の中に樹木や蔓の皮で塞いでいた。このために、殺傷力が弱められていたよう

ある。

日本人との戦いはたいへん苦勞した。私たちは近距離用の弓矢や短刀で日本兵を攻撃したので、Macacukes の戦役では、とても多くの私たちの族人と日本人が死んだ。そのため、Macacukes はみんなから不吉な地域と認識され、このためごく少数しかそこには行かなかった。日本支配時代になって小路が開かれ、戦後道路が開かれ、族人はそこから出入りするようになった。みんな、その時亡くなった人々の靈魂が崇っていると考えている。

私は Sinvaudjan（牡丹社）、Tjaljunay（女仍社）、Tjakudrakudral（牡丹中社）の家屋が日本人によって焼き討ちされたということをご老人が言うのを聞いてはいない。もしかするとほんとうは事実で、私が知らないだけかもしれない。記憶の中では、私の父親は昔私たちが山の上の住居地から移動してきたとはけっして言わなかった。もしほんとうに焼き払われたならば、すぐに元の場所に再建することは可能だったはずである。Kuskus（高士仏社）については昔いくつかの場所を遷したことは知っている。現在の石門村にいたっては、以前に Tjaqaciljai（茄芝路社）の人が住んでいたところだったが、彼らの人数がたいへん少なく、現在の石門は多くの異なる部落の人によって構成されている。

日本人が私たち Tjaljunay の少女を一人日本へ連れ去った。彼女は私の親戚である。その後、年老いて送り返されてきた。しかし、彼女はみんなと言葉が通じず、その上、山の生活に不慣れで、後年精神に異常をきたし、食事をせずに死んでしまった。」

Kuliu Patekaz の口述内容

「昔のご老人は Macacukes での日本人との戦闘、保力周辺の人が情報を伝えてきたという話を話された。ある人が私たちの部落を攻撃してきた。それでご老人たちは Macacukes に待ち伏せをして、双方激烈の応戦、しだいに族人は日本軍の強大な武力におされて後退し、その後、日本軍が進撃してきた時、ご老人たちは Tataqan（牡丹溪と女仍溪の交わる地点、現在の牡丹ダム附近）で岩を準備し、日本人が来るのを待った。最

後には日本人は私たちの部落を捜しだした。しかし、ご老人たちは密林に身を潜めた。日本人は探し出すことができなかった。日本人たちがどうして攻撃してきたのかという原因を私は知らない。」

Sauljaljui Pasavuta の口述内容

「ご老人たちはおしゃった。昔、Macacukes で qalja (敵人) と戦闘し、その後、Tataqan でも攻撃した。とても多くの人が死に、また多くの人を葬った。それで Macacukes と Tataqan は不吉な場所となった。」

文献には、牡丹社事件で戦死した牡丹社の頭目を阿碌、別の文献には阿勒克と記載されている。現在のご老人たちもまた祖先たちがこの勇士、すなわちパイワン語の発音では Aruqu について語るのを聞かされてきた。以下は Aruqu に関する聞き取り部分である。

Kivi Puiku の口述内容

「私は昔ご老人たちから Aruqu 個人について話されたのを聞いたことがある。ただし、細かい状況についてははっきりとは知らない。ただ、かのかの人はその時戦士を率い、日本人に対する作戦の領袖であった。かのかの人は聡明、勇敢、すごみがあり、部落中の勇士を率いた。かのかの人がそもそもよい頭目であったかどうかは、私は知らない。」

Sauljaljui Pasavuta の口述内容

「私は Aruqu が人を率いて Macacukes に行き qalja と戦ったかどうかについてははっきりとは知らない。ただ Aruqu は私たち Sinvaudjan の指導者であり、qalja が攻撃してくるような時、彼は当然人を率いて lemivu (駆逐人) を指導した。」

以上の話者のからの聞き取りから、Aruqu は Sinvaudjan の族人を率い、日本人に対して Macacukes で作戦を行い、族人は保力庄にいる友好的な村人から日本軍が部落を襲うという情報を得て、前もって、Macacukes で待ち伏せをした。当初族人は優勢を確保し、短期的には勝利を得た。但し、日本軍は兵数、武器、すべてにおいて族人よりも優越し、そのため情勢は逆転し始め

た。その後、日本軍は継続して進攻し、それに対して族人は Tataqan 等で日本軍を待ち伏せし、岩を山の上から落とし、日本軍を殺傷した。そうはいっても最後には日本軍は部落に行き着いた。ただし族人は全員深山の密林の中に逃げ去り、日本軍は族人を探し出すことはできず、第三者に依頼し、調停、協議を望んだのであった。

(一) Kuskus の叙述

話者：Puljaljuyan Pasavuta 述、Aruqu 訳

Mavaliu Valjeluk 述、

主要叙述内容：琉球人はどこから上陸したか、上陸後たどった経路、Kuskus の人はいかにして琉球人と対面したか。後、日本人が攻撃しようとした時の Kuskus の対抗過程。

Puljaljuyan Pasavuta の口述内容；

「琉球人が来た当時、Kuskus の部落は linivuwan (高士仏山の東方) にあり、はっきりと海をみることができた。

琉球人は高士溪の河口である九棚から上陸した。その時、vuvu (ご老人) たちは、耕作作業の最中であつた。ちょうどその時 vuvu たちは、かれらが植えたサツマイモを琉球人が盗み食いするのを見つけた。そこで vuvu たちは琉球人を追いだそうとしたが、琉球人たち全員に気づかれなかった。Vuvu たちは琉球人たちがとても多いことを認め、急いで、一群の不明な人がいることを部落に通知した。後に琉球人が部落に到着、一夜を過ごし、その後走り去り、竹社溪沿いを下り、石門に着いた。その後 vuvu たちは石門で琉球人に追いつき、琉球人たちがどうして逃げ走ったのかを彼らに聞いた。この時、Kuskus だけではなく Sinvaudjan や Tjaqaciljai の部落の人もしよに琉球人が山に入ってきた意図を尋ねた。双方言葉が通じず、その上、ある人が言った。琉球人を殺せば、これにより族人を守り、狩猟区域の保護を実行することができる。これによって琉球人は殺された。

後に日本人がやって来て、Kuskus と Sinvaudjan を攻めた。日本人が攻めてきた理由は、以前日本人を殺したので、彼らは仇を討つために、私たちの部落を攻撃したのだという。その後、私たち K

uskusとSinvaudjanはいっしょにMacacukesで日本と戦った。これらのことは私が小さい時、私のvuvuが私に聞かせてくれたことで、日本人と初めて戦うまでは日本人とは(vuvuは)誰か知りませんでした。当初私たちは彼らをAyuと呼び、後彼らが日本人であることを知りました。

わたしのvuvuが私に言うには、Macacukesに行ったのは、ある人が私たちに、日本人が車城からMacacukesを経て、KuskusとSinvaudjanを攻撃してくると伝えてくれたからで、それで私たち両部落の人は事前にMacacukesへ行き、待ちぶせして日本軍を攻撃した。この時、TjaljunayやTjaqaciljai人の参与もあり、ご老人たちはある程度準備をした。QaljaがKuskusとSinvaudjanを攻めて来るといった情報を知っていたのは、山の下の統埔人が伝えてくれたからであった。

Sinvaudjanがまず応戦し、後KuskusはValjeluk Puljaljayanによって率いられ、戦いに参加した。PuljaljayanはTjaqaciljaiのLukuljを娶り、そしてPuljaljayanはMacacukesへ行き日本軍を攻撃した時、彼の妻もまた攻撃するのを助けた。このことは部落の中では大変有名なことである。

日本人はまず十数人がやってきて、かれらは死んだふりをした。Vuvuたちは山壁に伏せて、Macacukesを通過する日本軍をまさに射撃した。ただしvuvuたちの銃はとても貧弱で、銃弾が詰められ、ちょうど射撃の準備をした時、銃弾が滑り出てきてしまう。日本軍はしだいに増えてきて、死んだふりをした兵もまたはい出し始めた。日本軍はMacacukesの地勢が非常によじ登りにくいと見て取り、大梅溪沿いに山頂を越え、vuvuたちの背面を攻撃した。その後vuvuたちは人数、武器すべてにおいて日本軍に及ばず、かれらを打ち負かす方法はないと見て取り、村に撤退した。この時、多くのvuvuと日本人が死んだ。その後、日本軍は前進を続けた。Sinvaudjanの人はTataqanの山頂に岩をおき、日本の進攻を見て取り、山上から転げ落とした。

日本軍との戦いにおいていわゆる勝敗はつかなかった。日本はわれらのvuvuと戦い、戦い終えた。ただし、私たちの古い武器は日本軍ととても大きな差があった。しかし、われらは自然の地勢

を熟知していたので、あちこちで援護し隠れることができる場所を持ち、深山密林の中に入り、日本人といえどもどうしようもないと確信していた。当初日本軍が山に入り我らの部落を探し出すために、相当の精力を費やしても、部落は探し出すことができた人が捕まえることはできなかった。だから、どうして、われらは日本人に負けたということができようか(いやできない。)

Valjeluk Mavaliiuの口述内容

「Puljaljayan(巴利鑿利鑿)部落群における狩猟活動区域の範囲は、西は車城に至り、北は牡丹湾旭海地区に至る。活動範囲は広大で海に接している。したがって、もともと耕作と狩猟だけでなく、漁もしていた。

琉球人六十六人の上陸地点は現在の港仔村漁港附近である。上陸後、港仔附近で漁をしていた漢人に出会った。漢人は彼らが清朝の援助で琉球に帰ることができるであろうことを知っていた。そこで彼らに南へ行くことを勧め、もし西へ行けば部落があり、部落の人は外人が部落の人の領地に進入することを喜ばないということ告げた。しかし、太陽が落ちる方位と山の地勢から、西へ行けば清朝が統治する県に行くことができると(琉球人は)考えた。それで西行を決定した。溪谷に沿って歩いていくと、たまたまKuskus部落に歩き着いた。琉球人はKuskus部落の人は非常にこわいということを見て取った。優れた皮膚は真っ黒で、大きな目、大きな鼻、耳たぶには穴が空けられ、その穴にはvacvac(一種の円形貝類)がはめ込まれ、男子は皆佩刀していた。だがKuskusの人は琉球人が善良であるを見て取り、かつ飢えていることがわかった。頭目ljjimatjaqは琉球人をもてなし、ある住居に案内し、琉球人にvinljukui(地瓜粒粥)を食べさせた。しかし、琉球人は夜中殺害されるのを恐れ、話し合いをした後、夜中に分散して、西に向かって逃げることになった。そのためSinvaudjanの一隊は一群の不明な者達が地域に進入してくるのを知り、彼らは琉球人の行方をひたすら追い始めた。

Sinvaudjan部落とKuskus部落の領地の境界は牡丹溪になる。もしある時両部落の狩人が偶然互いの領地に進入したとする。もっとも、獲物は

自分の領地にいたとしても当然、獲物は生きていて、この部落から別の部落へと移動する。獲物を追うためにみんな気がつかず、隣の部落の領地に間違っに入ってしまった。もし、気がつかないで、捕まえてしまった場合、両部落の頭目が各部落二三十人の壮漢をひきい、過ちを犯してしまった側が説明することになっていた。まさにその時、Sinvaudjanの狩人が獲物をKuskusの領地から追い出した時に当たっていて、琉球人と出会ってしまったのである。深山の中は草や木が密生している。(SinvaudjanとKuskusは)互いの安全のために暗号を持っていた。それでSinvaudjanの狩人は暗号を示した。意外にも暗号は通じなかった。それに加えて不明な数は多く、直接正面攻撃を加えるのは不可能であったためもあって、すぐに琉球人を追跡し始めた。別動隊は一群の不明なqaljaが山の中に進入してきたと部落の人に連絡するために帰って行った。ここでAruquは部落の男子を集め、部落を守るための作業を行い、自らはその他の男子を率いて不明群qaljaの追跡を続けた。

その後、琉球人たちは一路雙溪口（現在牡丹郷石門村の衛生所後ろ側）にある劉天保の交易所に走り着いた。劉天保にかくまわれたが、すぐに牡丹社の人たちが交易所を包囲した。一方Kuskus部落の人々は翌日の早朝に、かくまわれてしまった琉球人を発見した。Kuskusの人は琉球人に対する尋問を開始した。山の下で発見した時には、Sinvaudjan部落の人がすでに劉天保の交易所を包囲していた。劉天保氏は広東人で、山の下で交易所を持ち、私たちと狩猟物を交易し、塩、飾物、衣料、マッチ箱（マッチのニーズは猟に使用する火薬の材料とすることである。）等山の上にはない物と交換していた。平時は劉天保氏と私たち原住民は仲がよく、言語上でも簡単な意志を通わせることができた。

Kuskusが着いた時、Sinvaudjanの頭目Aruquが劉天保に対して琉球人の引き渡しを求めていた。Kuskusの人もまた好意で琉球人を引き留め食事を与えたにも関わらず、何の問いかけもなく絶対にしてはいけない、まさかと思われるような逃走をしたのか、翌日には一番に琉球人に聞いてみたいと考えていた。

この時期は、SinvaudjanがKuskusより多く、かつSinvaudjanの民族的性格はより勇ましく強かった。それで劉天保との交易はSinvaudjanの主導で行われ、Kuskusの人は周辺にいた。その実、劉天保もまた琉球人を保護できないことを知っていた。なぜなら劉天保は理由なく山に入ったならば、本来すぐに首を取られるということを知っていたからであり、交易の関係や、原住民といっしょに山へ行く以外には平安無事に山に行くことはできず、それ以外に道は無いということを知っていた。そのため劉天保は守り通すことができず、Sinvaudjanが琉球人一人を連れ出し、問いただした。しかし、双方の言語が通じず、お互いの意志を理解できず、そのため一人が殺され、その後、二人目、三人目、四人目と続いて殺され、中で待っていた琉球人は自分たちの仲間がただ出て行ったまま戻って来ないことに気づいた。痛ましい叫び声もあり、協議の後、それぞれ散り散りに四方へ逃げた。SinvaudjanとKuskusの人はこの状況を見て、ばらばらに逃げた琉球人を追いかけて殺し始めた。待っていたSinvaudjanとKuskusの人も動いた。水がめに隠れたり、あるいは密林や川の中に隠れた琉球人がいた。難を逃れて生き残ったのは十二人であった。その後劉天保の助けを受け統埔に送られ、それから楊有旺が残った人を鳳山県に送り清朝によって処理された。

当時の状況は、qalja（外力・敵人）が領地に侵入しさえすれば、機械的に首を取るというだけであった。例外はない。当時の風俗民情はこのようであった。そうでなければ当時の部落社会の秩序がどのようにして維持できたのであろうか。自由勝手にqaljaの侵入を認めることができようか。これは族群にとっての安全管理である。防衛は必要で、処理するにあたっては確実極めて強硬に行われる。ただこれしか方法がなかったのである。

その後、日本軍が来て、射寮に駐留した。以前はまだ公路がなく、往来する人は皆、海にそって行き来した。そのため射寮は陸路海路を問わず交通往来の要所であった。その意味がわかっていて日本軍は射寮に駐留した。かつ射寮は侵攻すべきSinvaudjanとKuskusの部落の前に位置していた。この情報はすぐに山の上に伝えられた。情報は統埔の村民が知らせてきたものであった。実際、

当時もまた私たち族人と漢人は結婚し、私の祖母はまさしく統埔の客家人であり、私が調べてみたところ、私の祖母は福建梅山人であることを発見した。現在、とても多くの親戚が海口、統埔、車城等の地に住んでいる。なぜならばとても早い時期から通婚していたからである。

日本軍は毎日偵察隊を山の状況を把握するために派遣した。ある時二人が行方しれずになった。日本軍はその実我々に殺されたということを知っていた。しかし、気候風土にあわず、瘴癘（悪性マラリア）によって病死してしまったと公言した。これは日本の大国主義的な国家的な論法だと理解することができる。正規軍が原住民によって物音もたてず刀や剣で刺殺されたということは非常に恥ずかしいことであったからである。

日本の武力はとても強く、私たちの武力はたいへん弱い。ただ、弓剣と土製の槍があるだけである。日本の銃の射程は遠く、かつ連発であった。私たちの銃は一つずつ弾を込めて発射する、時間がとてもかかり、その上ガジュマルの皮で火を点火するので煙りがあがり容易に発見される。そのため武器は弓剣刀等近距離から使用できる武器を使って日本の精良の武器に対抗した。私たちは確かに日本を正面攻撃する能力はなかった。古戦場では対峙久しからずして、我らは退却を開始した。日本軍は三方から進攻、西郷従道は中路を率い進攻、武器は比較的精良だったので、Sinvaudjan、Kuskus、Tjaqaciljai、Tjaljunayは各自の部落に退却した。日本軍は引き続き前進、各部落に至った。Sinvaudjanの部落の形態は散村である。そのため、壊されたのは一部分だけであった。Kuskus部落の形態は集村だったので、被害は比較的深刻であった。」

話者の語りによって次のことを知ることができた。すなわち琉球人は八瑤湾から上陸し、高士溪に沿って、Kuskus部落に行き着き、部落の人は琉球人を見て、彼らに食事を与え、かれらに一夜を過ごさせた。しかし、琉球人はその夜、逃げ出した。その後、竹社溪に沿って山を下り、たまたま交易所の劉天保のところに着いて、宮古島に帰ることへの援助を依頼した。ところがこの時には山の上の部落の人が集まってきて、劉天保に琉球

人をさし出すように要求した。数年後 Kuskus は山の下の方の統埔からの情報によって日本人を殺した。そのため Kuskus を攻撃することになり、その後、Kuskus の族人は Sinvaudjan の人といっしょに Macacukes で日本人と応戦することになった。族人たちは勇ましく応戦した。但し、日本軍の人数、武器は比較的優勢で、ついに日本軍は Kuskus の部落を探すために、多くの精力を費やし、部落を探し出した。人を探し出すことはできなかったが、家屋は焼かれた。このため Kuskus は日本に負けたのではないと後世認識されている。日本軍もまたたいへん多くの代価を払い、潘文杰の調停で、この戦闘は終了した。

(三) 其他

筆者は当初琉球人が上陸した八瑤湾周辺にある港仔村及び日本軍が上陸した射寮、そして両地のお年寄りの方々を訪問した時の事件に関する口述話者 姚丁興口述

張連風口述、蔡重仁訳

主要口述内容；琉球人の上陸地点、日本軍の上陸地点、および牡丹社事件に対する見方。

姚丁興の口述内容

「私は山地人と日本人が互いに殺し合ったように聞いています。ただどのようであったかはほとんど記憶していない。ただ記憶しているのは小さい時（私が覚えている8・9歳の時のこと）、日本人は現在の港仔港口附近と検査所附近に昔木の板を設置し、琉球人が上陸した地点を標示していた。」

張連風の口述内容

「私は以前お年寄り方から、日本人と牡丹地域の原住民が戦ったという話を聞いたことがある。それはとても昔のことである。私がまったく生まれてもいなかった時のことで、日本軍は原住民を攻撃した。原因は三人の琉球人がその辺りの海岸に上陸し、彼らの内二人が殺され、一人が保力あたりの姓が楊という人に救出されたことにある。日本軍は龜山南側の海岸から上陸し、現在そこは石碑がたっている場所である。石碑にはなんらかのことが書かれてるようだが、私は字を知らない

ので、なんと書いてあるのかも知らない。

日本軍はとても賢く、彼らは私たちこの辺の人を使って道案内をさせ、測量し、いっきに石門峽を打ち破り、そのあたりの原住民はみんなきりたった山の両側に身をひそめた。日本兵は（原住民が）一人一人が進んで来て、撃ち殺されたふりを知っていた。原住民はわりと愚かであった。思うに彼らは撃ち殺された。たいへん面白いことに日本兵はこれを利用して全力で進攻した。その途中日本兵は銃声が内外呼応しておこっていることを聞き取った。殺された原住民はとても多く、死ななかつた者も山中に逃げ去った。その後、日本人は、隠れたであろう一連のあちこちの山の上や樹林の中に行き、十余年後には日本人は正確に探し出すことができるような信頼できる地図をもってまた戻ってきた。ほんとうにたいへんすごいことである。そして、保力辺の楊という姓のものが日本人を助けて、その後、それゆえ（楊の）勢力権力がとても大きくなった。」

話者の言ったことから次のようなことがわかった。琉球人の上陸地点は日本が台湾を植民地にした後、標示があった。ただし、現今においては捜すことはできない。また日本の上陸地点射察には現在なお上陸記念碑が立っている。二人の話者の見方からわかったことは、牡丹社事件の発生は原住民が日本人を殺したことに原因があり、日本軍は原住民をすぐに攻撃し、原住民はわりと単純で、日本軍は比較的優秀で、そのため日本軍に攻撃され、（原住民は）山の中に逃げた。

第二節 事件の調停人

牡丹社事件の発生時、実際上瑯嶠十八部落の頭目身分として潘文杰が擁されていた。事件初期の降伏勧告と事件終結後の調停工作においては、重要な役割を演じた。多くのお年寄りには潘文杰の事績は多いという印象をもっておられる。筆者は潘家の嫡系の子孫を訪ねた。記録は下記の通りである。

話者 Puljaljyuan Paqevet の口述 Aruqu 訳

Kuliu Patekaz の口述 Aruqu 訳

潘榮宗口述

姚丁興口述

Puljaljyuan Paqevet の口述内容

「潘文杰と日本人の関係はとても良好であった。潘文杰は日本人の意思を私たち部落に伝え、私たちと日本人が仲良くなることを希望し、日本はすぐには Kuskus と牡丹社を攻めては来ないと話をした。しかし、私の vuvu たちと牡丹社全員は（仲よくなることを）望まなかった。その後 Macacukes の戦いが終わった後、日本人はまた山の上の部落に前進してきて、最後には潘文杰の提案を受け入れた。この結果、日本人との敵対関係は終了した。

潘文杰はこれによって日本と良好な関係を確立した。そのため彼の子ども潘阿比と日本人の関係も良好であった。日本が真正に私たちを支配した時、彼は総頭目となった。これは日本が潘阿比を任命したものであった。」

Kuliu Patekaz の口述内容

「後に満州近辺でたいへんな勢力をもった潘文杰は、人を派遣して私たちを説得した。ただ、私たちと日本人が仲良くすれば、日本軍は再び私たちを攻めることはない。日本は潘文杰を厚遇し、そのため潘文杰は日本人を助けたという話である。」

潘榮宗の口述内容

「実際のところを言えば、私は祖先の潘文杰について知っていることは多くはない。ただ、家に残されている形見から疑問を持ってはいる。というのは私の祖母に聞いたのだが、とほいうものの、私の祖母も知っていることは多くは無かった。ただ、潘文杰はたいへん立派な人だったと言われていた。現在私たちの家にはなお祖先が日本当局から贈られた形見が保存されている。内訳は次のとおり。

1896年(明治29年)8月1日、恒春撫墾署長相良綱が与えたところの毛筆で書かれた諭告書(図1)で内容は日本政府が潘文杰に与えたもので、土地の開墾と樟脳製造の事務指示が記述されている。

；また、征台司令官西郷従道中將が与えた一対の礼刀である。刀の柄の上には、鷹が蛇をつかみ、魚、貝、蝦などが精緻に美しく浮き彫りされている。

日本の勲章6個、一幅の佩刀(図2)、および

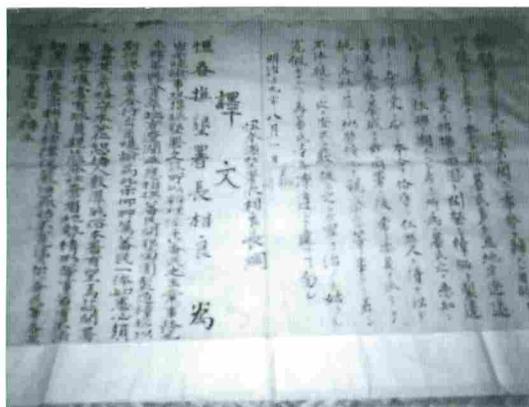


図1：諭告書



図2：礼刀、勲章、配刀

潘文杰の画像がある。この画像は今も残っていることができるが、槍と西洋剣は日本が台湾統治を終了した後政府に没収された。現在ありかはわからない。

ある時、自称瑯嶠研究史家が私の祖母（姚龍妹、潘文杰の孫の嫁、1994年逝去）を利用して、不注意にも宝物の一部を持って行ってしまった。はじめから政府に全ての形見を収奪されたわけではなかった。隠すために心を砕いた。近年になって再び入手した。当初政府が収奪した理由は、潘文杰と日本人の結託は祖国を裏切った国賊であるということであった。私は祖先が牡丹社の死傷者が深刻にならないよう望み、双方の中間人として動き、その実人々は好意的であった。ただ（後世）誤解をうけただけだと認識している。

私は昔祖母から聞いた。私たち潘家の祖先はたいへん立派で、かつ高い地位も持ち、潘家に嫁いだ彼の嫁（祖母）は非常に光栄であった。港仔から人に担がれた轎は旭海に着いた。これは平常みられるような嫁行列ではなかった。そして私の祖母は彼のしゅうと（潘阿比、潘文杰の長子）は潘文杰と比べてもさらに業績があったと認識していた。ところが、多くの文献上では潘文杰の功績が多く記されていて、それに対して潘阿比の事蹟は少なく記載されていると、ちょっと恨み言があった。私の祖母が口にした話では、以前のことはどうであったかね、どうであったかねであった。全ては私たちが旭海に来て以後のことを言い、私の祖母が嫁いで来たときにはすでに旭海に住んでおり、それゆえ満州の状況はほとんど知らなかった。

そうはいうものの私の祖先は政府に誤解された。ただ、私は祖先の勇気ある事蹟に対して、なお非常に光栄に感じている。

1996年、台東州政府は一枚の公文を発行した。私がある土地を所有することを認めるものであった。この土地は当初は台東地区の人のものであり、潘文杰を仲間に入れるために寄贈された土地である。したがってそのころ私の祖先潘文杰が恒春半島および東南沿海で勢力があったことを証明するものである。」

姚丁興の口述内容

「潘文杰は確かに立派な人であった。十八部落を管理し、その上昔牡丹社、高士仏社と日本人の戦争を調停し、日本人との関係がとても良好で、さらに潘文杰は日本の将軍とともに一つのベッドで眠ったことがあると聞いた。この時、潘文杰の地位はとても高貴であったと見ることができる。」

話者の口述から次のようなことがわかる。この潘文杰の調停人としての役割に対しては、立場が違えば、違った観点もあるようである。Sinvaudjan と Kuskus からの口述では潘文杰は日本軍を助けたために彼の地位は高くなったと思われる。；潘文杰の嫡系と姚丁興が言うには、潘文杰は大局を考えたがゆえに調停人となった。潘文杰は牡丹社事件を調停した人物ではあるがみんなの認識は異なり、立っている立場も同じではない、したがって見方も異なる。

第三節 事件後の変化

筆者はこの節で事件後の変化に焦点をあわせる。話者共通に（事件直後）は大きい生活の変化は無く、変化があったのは日本人が台湾を植民地にして以後であると認識している。そこで、この節に包含される時間は事件発生以後日本の植民地時代までの部落の生活変化を描くことにする。

話者 Savid Pavala の口述 Baules 訳

Sauljaljui Pasavuta の口述 Baules 訳

Kuliu Patekaz の口述 Aruqu 訳

Kivi Puiku の口述 Baules 訳

主要叙述内容：頭目Aruquの戦死により、部落内権力構成に発生した一連の変化と権力の新しい分配状況。

Kivi Puiku の口述内容

「私たち Puiku 一族は頭目の一族である。私たちは Sinvaudjan の地域に住んでいる。1997年6月24日私たちは招待を受け台湾原住民頭目聚会に参加した。その中の一員となり、参加した頭目一族は台湾各地九族の原住民頭目一族であった。

私たち Puiku 頭目家は特別の象徴図飾をもってはいない。屏東北部のパイワン族のおいても同様であるが、百歩蛇図や人型彫刻はあるようである。部落の中の族人は私たちが頭目の一族であることを知っている。私たちの地位は崇高で族人の尊敬を受けている。但し、日本人が来て以後、われわれ Puiku 一族がそのような特別の権利を持つことを許さず、完全に以前もっていた地位を失った。日本人が去ってしまって、私たちは頭目の身分を回復した。一世代上の族人はなお私たち Puiku 一族を尊重し、とった獲物を私たちに贈った。ただ現在の若い人は以前と同じではないようである。

Kavaluwan頭目一族はもともとTjakuvakuvu（内文社）に住んでいた。日本植民地時代前期 Cadjui Kavaluwan が獅子郷内文から族人を率いて Malingalingac に移ってきて、今の中間路の向こう側の山上を開墾した。もともと私たち Puiku 一族は Kavaluwan が同意も得ずに彼の族人をひきいてやってきた事に非常に反対した。ただ、一度協議し、彼らは私たちに賠償を払うと答

えたので、かれらが居住することを許すことにした。」

Sauljaljai Pasavuta の口述内容

「Sinvaudjan を指導した人は Ruljigaljig（漢姓姚）一族です。Ruljigaljig の頭目は Aruqu と Kuliu の vuvu と呼ばれました。彼らは私の vuvu 仲間で、とても昔の人である。私はお年寄り達から、私たち Sinvaudjan はとてもとても昔、Seqalu（満州地区）地域から移住してたと言うのを聞きました。Vuvu たちが私に言うには、昔の総会は特定の日（現在の豊年祭のように）にあって、盛大に焼いた獲物や酒など準備し、Seqalu の大頭目に贈った。大頭目に贈らなければならないということは、私たちの祖先が Seqalu あたりの人でなければならない、したがって Sinvaudjan は（Seqalu）管轄下の一部落であった。後に Seqalu の大頭目は Sinvaudjan に来て、遠く離れていて、管理することができないので、別に Sinvaudjan に頭目をたてることを認めた。

昔、分家の関係になったのは、私たちの祖先が別に新しい土地を捜して開墾し、これにより Tjuadjaqas（現在の鉄線橋溪の上流）に移住した。その後また Tjuadjaqas から Qenaljan（牡丹山の部落地名）に移った。最後に日本人は私たちが山の上に住むのはよくないと言い、そこで私たちは脅迫されて、現在の牡丹村の地域に断続的に移住した。」

Kuliu Patekaz の口述内容

「Sinvaudjan にはずっと以前は頭目はいなかった。私たちの以前の頭目は Seqalu あたりにいた。以前私たちは定期的に Seqalu に行かなければならなかった。焼いた獲物をもって大頭目のために運んで行った。そのため昔は私たちには頭目はいなかった。その後管理するために各部落に指導者を一人設けた。これによって Sinvaudjan は Ruljigaljig を立て、Sjayunin は Puiku を立てた。指導者を立てる基準は誰が指導能力があるか、部落人の心は誰を選ぶのかということである。

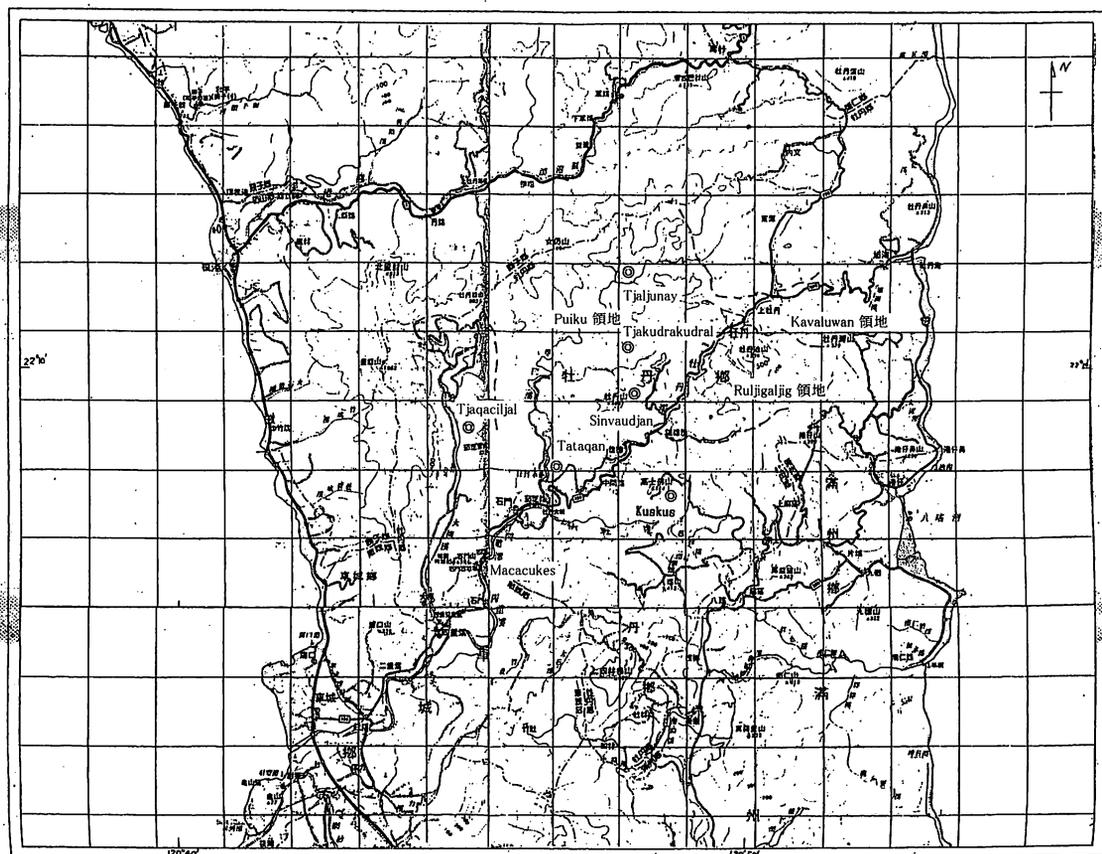
Kavaluwan は細心で頭が切れ才能があり、深く族人の歓呼を得、そのため以前 Puiku 頭目や Ruljigaljig 頭目の管轄に属していた族人もKaval

uwanを頼って行った。Kavaluwanの勢いはしだいに隆盛となり、日本支配時代には日本と良好の関係を築き、日本の支配から脱した後もCadjui Kavaluwanの子どもKarabiyac Kavaluwan(林吉牡)はやがて牡丹村長となった。

Ruljigaljig、Kavaluwan、Puiku、この三つの頭目一族は地図4にみるように各自狩猟区をもっている。Ruljigaljigの区域は鉄線橋溪の源流から牡丹溪の南岸まで、Kavaluwanとは現在の牡丹国小を境目とし、そしてKuskus頭目の狩猟区域と隣あっている。Kavaluwanは、また河の南岸で牡丹国小から旭海まで、Puikuは牡丹溪北岸から現在の牡丹村と東源村の村界までである。」

Savid Pavalaの口述内容

「本来Kavaluwan一族はSinvaudjan周辺に移って来ていない頃、Tjakuvakuvu頭目の一族に属していた。そして私たちKavaluwanの家系はSinvaudjanに移ってきてから私まで三代しか経っていない。私のvuvuであるCudjuiは彼と共に生きることを望んだ人々と、新しく彼らの新しい開墾地を求めた。Vuvu Cudjuiはたいへん厳しい人であった。彼の族人および私たちに後世比較的良好な生存環境を与えてくれた。そして私のKama(父親)Karabiyac Kavaluwan(林吉牡)は私のvuvu(祖父)に比して細心で頭が切れ、私の印象では私のKamaはいつも家にいなかった。それで私たちと話をすることはとても少なく、時間と精力を全て族人のために費やしていたように思う。」



地図4：牡丹社狩猟区図

出典：戸外生活図書公司、《台湾全圖》、頁100-103

そうは言っても私たちは移民としてやってきた。ただ、私の Kama の能力は衆目が一致していた。それで、Sinvaudjan と Tjaljunay の人がもし事ある時にも、私の Kama に援助を求めた。；どうして Sinvaudjan 大頭目という言い方があるのかは次のことに起因する。その後、みんなが現在の部落に降りて行った時、Ruljigaljig と Puiku 両指導一族がつまらないことで、(私はどのようなことでたいへん大きな争いになったかはよく知らないが) 言い争いは相互に戦闘する状況となり、その後、私の Kama は双方のもめごとを解決した。その後みんなは私たち Kavaluwan 一族を指導者としての風格があると見なした。それゆえ大頭目に推されたのである。その実、私の Kama が引き受けて標示したというだけで、したがってこれは美名である。

私の Kama は、指導能力が高かったので、日本人もまた Sinvaudjan の代言人に選び、その後日本敗退後も指名されて村長となった。その後も、選挙で村長となった。それゆえ、みんなは私たち Kavaluwan を大頭目と見ている。」

Kivi Puiku の口述内容

「1937年、ちょうど私が17歳の時、日本人が私たち Tjaljunay を現在の牡丹村に移した。新しく移った地を Sinvaudjan と言う。日本人が来て以後、私たち頭目は本来持っていた権利を日本人によって、よくない風俗だとみなされ廃止された。日本が来る前、私たちの権利は非常に大きかった。まるで昔の帝王のようであった。Tjaljunay に属する人はすべて私たちの言うことを聴いた。狩人が獲った獲物はまず私たちに献上した。その後、みんなで分かち合った。ただ、日本人が来て以後、私たちが指導者となるかわりに、みんなは日本人の指揮を必ず受けねばならなかった。

以前、まだ牡丹村に移る前、Tjaljunay の人は女仍溪に沿って、Sinvaudjan の人は牡丹山からの下りてくる稜線に沿って、現在の茄芝路の後ろに到り、再び四重溪に沿って四重溪村落に到着して交易を行った。私たちは必ず一日で戻ってきた。別の地方で一夜をすぐすべきではなく、通常私たちは山の上にはないような物品、塩、マッチ、衣類、塩魚、黒豆等を買うために下山した。塩とマツ

チは必需品であった。

私たちはその他の部落にも行くことはあった。ただし、ある決まった道を行かなければならなかった。勝手に変えることはできなかった。そうでなければ別の部落の領地に誤って入ってしまうのである。各部落とも共通の認識があり、境界がどこにあるか知っていた。それで、故意に平常歩かない道を歩く人はいなかった。私たちと高士伝部落とは通婚があり、当時高士の道に行くには現在の鉄線橋の橋辺りから溪に沿って山を上り、その後稜線沿いに高士に到着した。その後、日本人はわれわれに許可無く他の集落へ行くことを許さず、違反したら必ず懲罰を課した。また、他部落と通婚することも許されなかった。ただごく少数だが高士の人と通婚する人もいた。」

Kurui Patekaz の口述内容

「以前の部落の形態は、一家族一小集落で、とても多くの小集落によって一つの部落が形成されていた。ほぼ数百メートル離れていて、たいへん分散していたが、ただし範囲が限られていた。Sinvaudjan の以前の部落位置は牡丹山山頂の東を下った一点にあり、視野が良好で、車城あたりの海を見渡すことができた。以前私たちは四重溪に行かなければならず、稜線に沿って Tataqan に到り、再び溪沿いを歩いた。；Tjaljunay の位置は女仍溪の中流にあり、Tjakudrakudral の位置は Sinvaudjan と Tjaljunay の中間にあった。」

Savid Pavala の口述内容

「当初日本人は Ruljigaljig、Puiku、Kavaluwan の部落族人を一緒に同一の区域に移して、一つの大部落を形成した。このため Sinvaudjan の人数が最も多く、そのため新しく形成した大部落は Sinvaudjan と統称された。」

話者が物語るには、事件発生以後部落の生活習俗に大きな変化はなく、日本人もまた部落に駐在を派遣することもなく、部落はなお以前の生活のままであった。変化があったのは部落の指導者の交代である。Aruqu 父子がその時戦死し、部落を率いる新しい指導者を選出しなければならない状況で、Kuliu が受け継いだ。Aruqu と Kuliu

はともに Ruljigaljig の同一家族で、但し、この二人のほんとうの関係は話者でも確定できなかった。

頭目は部落の指導者である。部落の個別の問題を解決するだけでなく、外来の敵に対する指導も行わなければならない。また、部落の耕地の地力が尽きてしまったならば、本来自分の部落の族人のため、別の良好な耕作地を求める責任がある。これにより Cudjui Kavaluwan は事件の後に、彼の族人を率いて Sinvaudjan と Tjaljunay の領地を開墾した。Cudjui Kavaluwan はこのために Sinvaudjan と Tjaljunay の反対を受け、彼は折衝を展開し、その後 Cudjui Kavaluwan は賠償することで居住を認められた。

その後、日本が台湾を植民地にした後、部落の生活習俗は変動した。たとえば、頭目制度は廃止され、自由に他の部落へ行くことも許されず、一人の頭目が立てられ、現在の牡丹社に村が移動される等変動した。当初日本は Ruljigaljig、Puiku、Kavaluwan の部落族人を一緒に同一の区域に移して一つの大部落を形成した。このため Sinvaudjan の人数が最も多く、新しく形成した大部落は Sinvaudjan と統称された。そして Cadjui Kavaluwan の移住があり、同時に Sinvaudjan と Tjaljunay との間に新局面が生まれた。結果、Cadjui Kavaluwan は日本が台湾を植民地にした後、Sinvaudjan と Tjaljunay を指導し、両部落の唯一の大頭目となった。日本敗退後は頭目の地位は回復したが、権限はなかった。